



写真上は宝塚歌劇大劇場と武庫川を渡る阪急電車。写真左は、宝塚駅周辺に飾られた宝塚歌劇100周年を祝う赤いバナーと、宝塚市制60周年、手塚治虫記念館20周年・宝塚歌劇100周年を祝う白いバナーのセット。

宝塚市消防本部



宝塚市消防本部西消防署の皆さん



「鉄腕アトム」など、手塚マンガを再現した手塚治虫記念館



宝塚市消防本部東消防署の皆さん



宝塚市・川西市・猪名川町消防指令センターの皆さん



3t重機（搬送車含）



平成27年4月に発足の高度救助隊「BRAVE PHOENIX RESCUE」と特別救助隊のワッペン。図柄は宝塚大学造形芸術学部の学生がデザイン。不死鳥をモチーフに不撓不屈の精神で職務を貫くことを表現している。

市民力を結集した消防体制の充実を実現

—宝塚市消防本部—

歌劇のまち、温泉のまちで知られる宝塚市は、兵庫県南東部に位置し、市域は南北に細長く、住宅地が広がる南部市街地と、豊かな自然に囲まれた北部田園地域から成り、市街地から大阪や神戸へはいずれも電車で30分ほどで、年間を通して877万人もの観光客が訪れる国際観光都市である。

特に今年は、宝塚市制60周年、宝塚歌劇100周年、手塚治虫記念館20周年という記念すべきトリプル周年を迎えている。総面積は101.89km²（東西12.8km、南北21.1km）で、管轄人口は22万7,911人（男性10万6,092人、女性12万1,819人）、世帯数は9万3,754世帯である（いずれも平成26年8月1日現在）。

宝塚市消防本部管内の平成25年の火災件数は48件（前年比12件の増）、救急出動件数は9,980件（前年比15件増）、搬送人員は8,818人（前年比202人増）、救助活動件数は166件（前年比9件増）、救助人員は106人（前年比1人減）となっている。今回、石橋豊消防長はじめ、幹部の方々にお話を聞いた。

本誌 宝塚市消防本部の概要をお聞かせください。

石橋豊宝塚市消防本部消防長 当消防本部は、昭和29年4月に発足し、現在は、1本部2消防署7出張所244名（うち女性7名）。消防車両は消防ポンプ（タンク車含む）自動車15台、はしご付消防自動車2台、化学消防ポンプ自動車1台、救急車6台、救助工作車2

台などで、平成25年3月には緊急消防援助隊震災対応特殊部隊として登録する3t重機（搬送車含）を配備しました。

現在、職員の平均年齢は38.2歳で、団塊世代の大量退職に伴う大量の新規職員の採用により、30歳以下の職員が100名を超えました。宝塚消防の



石橋 豊

宝塚市消防本部消防長

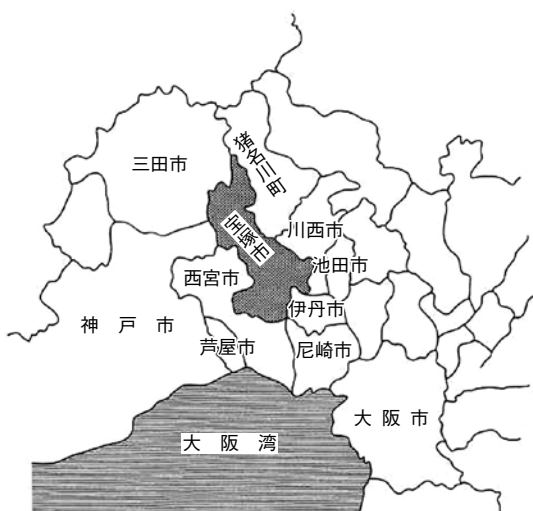
誇れることの一つに火災件数が少ないことが挙げられます。1年間の出火件数を人口1万人あたりで表す出火率でみると、過去10年で最も火災件数が少なかった平成22年で1.1%、昨年が2.0%で「安全な宝塚」が維持できている反面、若い職員の現場活動の経験不足が最も大きな課題になりつつあるのが現状です。

大谷英次次長 また、救急需要への対応と救急出動件数の平準化を鑑み、平成17年4月に西消防署南部出張所の増隊に合わせて高規格救急車1台を増車、同25年4月には東消防署に配置していた非常用救急自動車1台を活用して同消防署に救急隊を1隊増隊しました。現在は救急隊6隊で運用しています。

この人員確保のために、平成24年度には職員24名を新規採用するとともに、職員間の指揮命令系統の確立及び更なる職責の自覚を意識させることを目的に、役職に対する階級の見直しも同時に行い、係長級を消防司令補から消防司令へ、主任級を消防士長から消防司令補へそれぞれ格上げを行いました。昇任試験においても受験資格である勤続年数の短縮を図ることにより、職員のモチベーション向上に努めているところです。

若い職員の技術不足を補い、組織の向上力を図る「メンター制度」の導入

本誌 今年度下半期から導入される「メンター制度」



宝塚市の位置

についてお聞かせください。

大谷次長 消防長の話の中にも出ましたが、団塊世代の大量退職に伴い、当消防本部の最近5年間の退職者数は63名、それに対し新規採用者は69名と、組織全体の世代交代が進んでいるため、若手職員の育成にも取り組んでいます。定期的に消防技術の継承を目的とした各種研修会を実施しているほか、今年度下半期からはメンター制度を導入し、市民に信頼され続ける消防士、また公務員、社会人を目指します。

メンター制度とは、配属部署における管理・監督職の上司とは別に指導・相談役となる先輩職員、つまり主任クラスの年齢的には若い職員、中堅職員が新人職員をサポートする制度であり、新人職員の仕事における不安や悩みの解消、業務の指導・育成を行うもので、その指導を行う先輩職員にとっても、マネジメントの技術を身につけることができるものと期待しています。1名が5名程度を担当することになると思います。

ホテル・旅館等に係る表示制度がスタート

本誌 ホテル・旅館を対象とした新たな表示制度が本年4月からスタートし、表示基準に適合したホテル等については、8月1日から表示マークを提出することが可能となりました。現在の状況をお聞かせください。

藤原裕二予防課長 当市においては、防火・防災管理上の表示基準に適合している旨の表示をする対象物は、「ホテル・旅館等のうち、防火管理者を選任しなければならない防火対象物で、地階を除く階数が3以上のもの」としており、6施設がこの制度の対象となっています。当該制度の説明を行ったところ、現在（7月20日時点）、2施設が申請する意向を示してお



宝塚市消防本部庁舎



前列左から、吉田暢元総務課長、石橋豊消防長、大谷英次次長、高橋康宏警防課長。後列左から、藤原裕二予防課長、中村啓朗情報管制課長、塗谷健治情報管制課長。

り、現在関係者と調整中です。

本誌 社会福祉施設、病院・有床診療所などの査察状況についてお聞かせください。

藤原予防課長 平成25年2月8日夜に発生した長崎県長崎市の認知症高齢者グループホームの火災において、多数の死傷者が発生したことを受け、翌日には市内の類似する40施設に対して、特別査察を実施しました。その結果、防火管理者の未選任の施設が1件、消防用設備等点検結果報告書の未報告施設が1件ありましたが、その他、重大な違反等は見受けられませんでした。

また、同年10月11日の未明に発生した福岡市博多区安部整形外科の火災を受け、その日のうちに市内の病院・診療所（病床19床以下）のうち、入院を伴う15施設と、別の日に1施設、計16施設を対象に特別査察を実施しました。結果、訓練未実施の施設が1件ありましたが、重大な違反等はありませんでした。

経験を通じて「人を説く技術」を学ぶ

本誌 予防技術の伝承も課題だと伺っていますが。

藤原予防課長 予防業務を行う上で一番大切なのは、「人を説く技術」です。若い職員は予防技術や消防設備士の資格取得に前向きで、技術的なノウハウが高く、法令上の違反箇所の指摘や指導はできますが、次のステップである、事業主を納得させて、実際に改善してもらうところまでできなければなりません。この部分がなかなか人生経験の少ない若手職員には難しいようです。団塊世代つまり経験豊富な職員から若い職

員への交代の過渡期の今、人を説く技術、会話力といっても良いと思いますが、これらも傳承していく必要があると思っています。

石橋消防長 私は「消防の究極の行政サービスは、現場活動にある」を信念としています。です

から、なるべく若い時にいろんな部署に配置させ、とりわけ少数の対応になりがちな予防業務には、できるだけ多くの若い職員に経験を積ませて、警防、予防の両面から得た知識と技術をもって、質の高い現場活動ができるような人事ローテーションを心掛けています。

危険物については、宝塚市が住宅地であることから、大きな危険物施設もなく施設自体も減少傾向にあるため、同じ兵庫県内でも臨海部の消防本部とは経験値はもちろん担当職員の数も少ないのが現状です。その中で、若手職員の育成の一環として、警防や救急の職員が予防技術検定などの各種資格や検定を受験したい場合も、人数を限定せず助成していますし、公費で賄えないところは、昭和52年から現職の係長職以上で組織する会が助成しています。職員が自己実現という観点で積極的に資格取得に動いてくれるのは誇らしいところです。

宝塚市庁舎放火事件を受けて

本誌 平成25年7月の宝塚市庁舎放火事件以降、不特定多数が出入りする施設の防災指導などについて取り組まれていることをお聞かせください。

藤原予防課長 宝塚市庁舎放火事件を受け、平成25年秋季火災予防運動期間中には、行政出先機関（市民対応窓口を有する）施設で施設職員を対象とした放火火災研修と実地訓練（消火器の取扱い、自動火災報知設備の操作、防火戸・排煙装置の機能や操作、2方向避難経路の確保等）を行うなど、各行事の機会を捉えて、放火火災防止及び被害軽減対策について指導を行いました。

また、今年の5月には、例年実施している市役所と消防機関との合同訓練において、放火火災を教訓とし



宝塚市役所との消防訓練



宝塚大劇場の自衛消防隊による消防訓練

た内容の訓練・指導を行い、更に、今年の火災予防運動期間中には、大規模な事業所を対象に屋内消火栓の取扱技術の向上を目的とした特別消火講習会や防火講話の実施につきまして検討しているところです。

本誌 年間を通して多くの集客のある宝塚大劇場の防火防災対策についてはいかがでしょうか。

藤原予防課長 宝塚歌劇のホームステージである宝塚大劇場は本市管内に所在し、一年を通じて、多くの集客で賑わいを見せています。そして、劇場関係者は、興行面だけでなく、防火安全面についても細心の注意を払われており、消防用設備等の維持管理や、自衛消防体制について自主訓練を定期的に行い、入念なチェックを行っておられます。

特に火災予防運動期間中には、消防本部とも連携しながら公演中のステージの幕間休憩時間を活用して、客席数約2,500の大劇場から観客を一斉に劇場外に退出させる避難訓練を実施するなど、創意工夫を凝らして、自衛消防隊の教育（訓練）のみならず、来場者に対してもご理解、ご協力をいただき、防火防災の啓発に努めているところです。今年度にあっては、宝塚歌劇創設100周年の記念の年ということで、メディアほか各方面から話題に取り上げられることが多いことと、各公演とも例年以上の来場者が続いているため、安全体制には、通常以上の注意を払い、更なる連携を強めているところです。

市民、消防、医療機関が協働して救命率の向上を図る

本誌 救急隊の増隊と管内の救急需要の増大と併せて今後の対応についてお聞かせください。